

令和 3 年 6 月 10 日現在

機関番号：11501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13341

研究課題名(和文) 日本帝国主義の満洲経営と植民地統治との連動/背反に関する思想的研究

研究課題名(英文) The Research of the Concord and Conflict Appear in the Ideal of Manchukuo and Colonial Taiwan Under Japanese Rule

研究代表者

許 時嘉 (HSU, SHIHCHIA)

山形大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：10709158

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、被植民者からみた植民地統治と満洲経営を考察し、日本帝国主義の満洲経営と植民地統治の原理との連動/背反を明らかにするものである。成果は次の二点にある。(1)1920年代の米国排日法案に対する日本本土の言論と植民地台湾のそれとの温度差を検証し、排日法案は台湾人の「弱小民族」としての自意識の形成に拍車をかけ、アジア共同体の理想像に裨益する「日華親善の架け橋」という自己認識を強化する契機となったことを明らかにした。(2) 満洲事変に対する当時の台湾人の主張を考察し、日本の満洲占領に疑念を抱きつつ、新天地である満洲の開拓に赴くことをポジティブに捉えた植民地台湾の言論界を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、同時代の思想言説や輿論の新聞記事、私人日記、手稿など複数のアプローチを活用することで、多様なナラティブの共存とその意義を再考し、従来行われてきた個人史的研究や地域偏重の個体研究を全体主義研究のマクロの視座から総合的に再検討できた。日本帝国主義の「不均質性」と「重層性」という特徴に着目し、大陸進出と植民地経営の連動と相反を明らかにすることによって、日本帝国主義から全体主義への推移の特徴とそのイデオロギーをアジア史の枠組から確認することができた。

研究成果の概要(英文)：This research clarifies the concord and conflict appear in the ideal of Manchukuo(State of Manchuria) and colonial Taiwan under Japanese rule, especially from the point of view of Taiwanese intellectuals. It is verified that the Immigration Act of 1924 had intensified Taiwanese's identity on their own race as a weak ethnic group. It appeared in not only their realization as a bridge between Japan and China, but also a positive opinion on the East Asia community. On the other hand, when the Manchurian Incident occurred in 1931, Taiwanese intellectuals looked forward to the ideal of a new world, despite the fact that they showed anxiety on the Japanese invasion of Manchuria as well.

研究分野：思想史

キーワード：植民地台湾 満洲国 米国排日法案 日華親善

1. 研究開始当初の背景

戦前日本の膨張主義ないし帝国主義の形成の要因は、近代日本の根源的な封建性(H・ノーマン)、天皇制国家の支配原理の膨張(丸山真男)、日本版資本主義発展の後進性(矢内原忠雄)と理解されることが多かった。それに対して、筆者は明治期日本帝国主義の植民地統治の実態と文明言説というイデオロギー現象の相関関係に注目し、その相互規定の過程には、東洋的 文 イデオロギーや前近代的国家概念などの要素が混在し、両者の間に連続、あるいは齟齬、断絶を引き起こすエネルギーとなったと指摘した。さらに、この 文 イデオロギーとそれを外化するものの存在(例えば膨張主義における漢詩文創作の志向性と規範性(カノン)との二律背反)を植民地台湾と清末中国に越境した漢詩人初山衣洲の事例を介して分析し、両者の齟齬や断絶の理由解明に手掛りを提供した(若手(B) 課題番号 26870069 / 平成 26-28 年 / 代表許時嘉)。しかし、上記の研究成果は明治期の文明言説と植民地統治の事象に限定したものであり、日露戦争以降成熟した日本帝国主義の発展に関しては更なる検証が必要である。

日露戦争以降、日本の大陸経営が本格化すると、後藤新平に代表される台湾総督府の官員たちは、今度は満洲に赴いて新天地の開発に尽力した。先行研究としては、台湾経営を積極的大陸政策の原型と認識し(小林道彦)、その延長線上で植民地官僚の言動を地道に研究するもの(岡本真希子)や、総動員帝国としての満洲論(L・ヤング)、あるいは台湾・朝鮮・満洲を全面的に包摂する統治実態に関する緻密な研究(駒込武)などがある。興味深いことに、その後により上げられた「五族協和」の理想国である満洲国は、終戦まで宗主国との格差を是正し得なかった植民地台湾と全く異なる経営理念を掲げていた。日本帝国主義の「諸相」(橋川文三、松本健一)と解釈されているこの二様の統治理念がなぜ有機的に共存しえたのか。この疑問に対しては、まだ総合的な思想史研究がなされていない。

上記の問題意識に基づき、筆者はまず日本帝国主義体制下の被植民者の越境に注目する。20世紀初頭の黄禍論による米国の一連の排日移民法が公開されて以来、日本国内では反発が起こり、東アジア連合体の理想像が膨らむに至った。日本帝国主義は植民地統治において植民地人民を日本人民と区別し、差別化すると同時に、大陸進出の「満洲国」の建国には「五族協和の王道楽土」という看板を掲げ、西洋帝国主義の人種イデオロギーへの反発を表明していた。この日本の膨張行動の二様の論理が西洋世界の人種差別意識の敷衍/反撥を同時に内包することは注目に値する。その中で、被植民者が帝国主義体制下に積極的に「越境」した実態は、まさしくこの二様の論理のねじれを分析するための恰好の例と考えてよい。しかし、戦前の膨張する帝国の人流に関するこれまでの研究(『岩波講座 近代日本と植民地』シリーズ、蘭信三)または満洲国関連の一次資料や体験談、文学作品、関連研究は、日本語資料や日本人の満洲滞在を偏重する傾向がある(小林英夫、山本有造、貴志俊彦、川村湊)。一方、台湾では台湾人の満洲経験に関する貴重なオーラルヒストリーや日記など一次資料が多く出版されているものの、帝国内部の人材周遊という解釈(山室信一)や血涙史の分析(許雪姬)に止まり、日本帝国主義の体制との連動/背反に関する体系的研究には至っていない。

2. 研究の目的

上記の問題意識に基づき、本研究の目的は、被植民者として満洲に越境した台湾人知識人の思想的背景とその実態を対象として考察し、そこから日本帝国主義の満洲経営と植民地統治の原理との連動/背反を把握し、大東亜共栄圏の成立からその全面的崩壊に至る帝国主義的病理の深化の原因を明らかにすることにある。具体的な課題は下記の通りである。

- (1) 黄禍論と連動して生まれた東アジア連合体の理想像に関する日本本土と植民地台湾の世論の温度差を明らかにする。植民地台湾の言論界は 1906 年の米国の日本人学童隔離事

件を報道する際、米国の人種差別に憤懣を抑えきれない日本本土の記事と異なり、日本人小學校から拒否された台湾人児童の境遇を同時に暴露し、日本国の「文明性」に潜む差別構造を浮き彫りにした。つまり、東アジア連合体の構想が固まりつつある中、日本本土の言論と植民地台湾のそれとの温度差は、日本帝国主義の内部構造のねじれを物語っており、後に「民族協和」の夢を抱いて満洲へ渡る台湾人の思想的背景にもつながっている。更なる全体像を得るため、1904年の日露戦争から1931年の満洲国成立までの日本と台湾の新聞記事のアメリカ排日報道とその波紋を考察し、東アジア連合体の理想像に対する宗主国と植民地の「同床異夢」を確認する。

- (2) 台湾人の満洲滞在の実態からみる大陸進出と植民地経営の狭間を分析する。日本の大陸進出とともに移動する被植民者の私人日記、書簡、オーラルヒストリーを分析し、満洲国の公文書、公的資料集と照合をしながら、日本帝国主義体制下における被植民者の移動とそのメンタリティーを明らかにする。彼らの「越境」と台湾総督府の近代化志向の相克を分析することで、満洲国が呈した活気のある文化活動と様々な試行錯誤に映し出されたイデオロギー的諸相を検証し、大陸経営と植民地統治の二重性とその意義を解明する。この二重性を明らかにすることは、日露戦争以降日本の近代国家体制が本格的に確立された後の大陸への進出とその侵略の本格化、そして大東亜共栄圏の幻想からその全面的崩壊に至る帝国主義的病理の深化を理解するための端緒となるように思われる。

本研究は、同時代の思想言説や輿論の新聞記事、私人日記、手稿など複数のアプローチを活用することで、多様なナラティブの共存とその意義を再考し、従来行われてきた個人史的研究や地域偏重の個体研究を全体主義研究のマクロの視座から総合的に再検討することを目指している。日本帝国主義の「不均質性」と「重層性」という特徴に着目し、大陸進出と植民地経営の連動と相反を明らかにすることによって、日本帝国主義から全体主義への推移の特徴とそのイデオロギーをアジア史の枠組から確認して試みたい。

3. 研究の方法

アメリカの排日移民法前後をめぐる人種論言説とその波紋を中心にして、同時代の日本と台湾の新聞記事、思想言説の資料を収集し、各時期の日本・台湾のマスメディアの報道状況と輿論傾向の変化について分析する。膨大な新聞記事の収集をより効率的に行うため、既存のデータベースを活用するほか、データベース化されていない書誌資料については、アメリカの排日政策発布直後の1906年日本人学童隔離、1908年日米紳士協約による移民制限、1913年・1920年日本人移民の土地所有禁止、1924年日本人移民禁止、という四つの時点に注目し、その前後の記事を中心に収集し、分析した。その手順と具体的な工夫は次の通りである。

- (1) 排日移民法の人種論言説とその波紋を中心にして、日本と台湾の新聞記事、思想言説を資料収集し、人種差別政策の反発と東アジア連合体（大東亜共栄圏）構想との連動性、日本国内の世論と植民地台湾のそれとの差異について分析した。
- (2) 戦前台湾人の満洲滞在の関連資料を収集、考察し、日記や追憶録の私的史料を満洲国公文書と照合して、1930年代前後に日本帝国主義体制下における被植民者の流動の実態を明らかにした。
- (3) 植民地台湾から離れた初山衣洲の清国体験を対象にして研究し、清末中国で活躍している日本人知識人集団内部の多様性に注目し、中国保全論に関するイデオログたちの思想言説及び中国現地の言説空間、彼らの実際の活動実態と照合し、中国経営に混在する様々な思惑を複眼的に考察した。

4. 研究成果

(1) 米国排日法案の影響による植民地台湾の政治運動言説の差について：

1920年代の『台湾民報』における排日運動関連の報道を中心に分析し、1913年～1924年米国の一連の排日運動による日本国内の世論変化と台湾議会設置請願運動に及んだ波紋について考察し、以下の知見を得た。排日運動による日本国内のアジア主義者たちの黄人種白人種の対決論とアジア民族団結論が台湾人知識人たちに意図的に利用され、台湾総督府の政治弾圧(議会設置請願運動への厳しい取り締まり)に対抗するために活用された¹。これらの言説は台湾人自身自身による議会設置の合理性を強化し、日本人と異なる民族である「台湾人」の自意識を固める一方、日本人と異なる民族という自意識から、「日華親善」の架け橋と自任する自己認識も台湾人の間に漸次に形となった²。つまり、1920年代のアメリカ排日移民法に対する日本本土の言論と植民地台湾のそれとの温度差は日本帝国主義の内部構造のねじれを具現化するものであり、米国の排日は「弱小民族」としての台湾人自意識の形成に拍車をかけただけでなく、ある種のアジア共同体の理想像に裨益する、「日華親善の架け橋」という自己認識を強化する契機ともなったことが明らかになった。

(2) 植民地台湾人からみた満洲国について：

満洲事変に対する当時の台湾人の主張を考察し、日本の満洲占領に疑念を抱きつつ、新天地である満洲の開拓に赴くことをポジティブに捉えた植民地台湾の言論界を解明した。1930年代台湾人主宰の『台湾新民報』の報道を考察した結果、事変がもたらした経済面の利害関係の分析に終始し、満洲事変を両国の間で平和的に解決してほしいという論調が前面に押し出されていたことが明らかになった。同誌が「日中は同族の関係にある」という日華親善の重要性を訴えていることは、20年代の議会設置請願運動以来の論調 政治参加と自治権付与の正当性を証明するために、台湾人がいかに日本と中国の架け橋として活躍できるかをひたすら強調してきた日華親善論と一致している。また、民族運動指導者として知られる林獻堂の日記を考察すると、日本の満洲進出に対してはやや否定的な態度を示しながらも、彼は台湾人が新天地に赴くことに高い期待を寄せている。この矛盾する心象風景からは、植民地台湾社会の閉塞感から解放されたいと渴望する彼の気持ちがどれほど切実なものであったのかが窺えるのだろう³。

(3) 1900年代アジア主義者と関連者たちの多様性について：

2020年3月からはコロナウィルスの影響によって海外調査が難航していたので、研究方向を修正し、1920年代に流行っていた「日中親善の架け橋としての台湾人」という言説の系譜を辿り、アジア主義者と関連者たちの多様性を分析することにした。「日中親善」というスローガンは、最初日本人アジア主義者の間に現れ、その後、1898年に荒尾精の台湾滞在により台湾人に植民地経営の協力を宣伝する内容として登場し、それ以降、台湾人の政治権力要求の場面に活用されたことは前年度までの研究において明らかになった。一方、アジア主義という思想は一枚岩の存在ではない。よって、1900年代において日本人アジア主義者内部に潜んでいる多様性を、同時代の黒龍会会報や『東亞月報』の記事内容と1905年から1910年にかけて清国で活躍していた勅山衣洲の事例に即して分析を行なった⁴。その知見が以下の通りである。

衣洲の交友関係から分かるように、当時職場の関係者には大陸浪人やアジア主義の論者が多かったが、衣洲本人はアジア主義者ではなく、アジア主義支持者であることさえ言い難い。例えば、保定時代に家族ぐるみの付き合いで衣洲と親交を続けた寺西秀武が陸軍出身でシナ通として有名だった。一方、寺西との交友関係が親密だった衣洲の日記や著作、遺稿集を分析している限り、衣洲には黒龍会関係者に共通する「志士」的な言説は一切見られておらず、むしろ政治イデオロギーと一線を画し、文学者としての顔が際立っているのが興味深い。その特徴は遺稿集の「氷壺軒筆記」で強く見受けられる。中には清朝皇室の退廃を批判する内容がある一方、その内

容はあくまでも事実報道のレベルにとどまっており、同時代黒龍会の浪人志士のようにすぐさま大陸経営の積極的な対策建言や抱負心と結びついてはいない。衣洲の事例は清末中国で活躍している日本人団体内部の多様性と「個」の存在を示唆しているといえよう。

（４）戦前から戦後に至る植民地統治理論の言説空間について：

植民地台湾の断髪運動賛成論における明治維新期の断髪記憶のよみがえりを考察し、断髪肯定論の底流に伏在している過去の経験の置換えが、帝国—植民地統治構造における絶対的な支配位置を強化したことを確認した⁵。また、レオ・チン『ピカンミング・ジャパニーズ』（勁草書房、2017年）を対象として戦前の日本統治の言説空間および台湾人のアイデンティティ認識の葛藤を再考し、40年代以降に満洲移住を積極的に選んだ台湾人の思想的背景に関する知見を得た⁶。

¹ 【学会発表】許時嘉「被植民者からみた排日移民法 『台湾民報』を中心に」、日本比較文学会東北支部第18回比較文学研究会（仙台市）、2018年7月28日。

² 【学会発表】許時嘉「1920年代台湾人的「亞細亞」意識 從美國排日移民法的影響谈起」、査読無、開放的台湾史研究会（台北市）、2019年3月29日

³ 【招待講演】許時嘉、「招待講演 山大の集い 台湾人からみた満洲国」（東京都）、2019年9月21日；【講演記事】許時嘉「台湾人からみた満洲国」「東京ふすま会会報」145号、20191201、4面。

⁴ 【雑誌論文】許時嘉、「此身類飛蓬、此心淡如水」 初山衣洲の清国体験をめぐって、山形大学人文社会科学部研究年報、(18)、2021年02月

⁵ 【学会発表】許時嘉、歴史経験の反復と記憶の風化 日本人の目に映る台湾断髪運動を中心に、国際シンポジウム「文化の記憶 虚構の力」、2017年11月11日、愛知大学

⁶ 【書評】許時嘉、「台湾人アイデンティティをめぐると言説空間のダイナミズムを明らかにする 「行為媒体の分節化」を主題として日本と台湾の戦前戦後の思想空間を往復しつつ分析」、『図書新聞』3338号、5面、2018年2月10日

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 許時嘉	4. 巻 18
2. 論文標題 「此の身は飛蓬に類し、此の心は淡きこと水の如し」 初山衣洲の清国体験をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山形大学人文社会科学部研究年報	6. 最初と最後の頁 25-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 許時嘉	4. 巻 145
2. 論文標題 「山大の集い」記念講演 台湾人からみた「満洲国」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 乾坤（東京ふすま会会報）	6. 最初と最後の頁 4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 許時嘉	4. 巻 なし
2. 論文標題 台湾人アイデンティティをめぐる言説空間のダイナミズムを明らかにする 「行為媒体の分節化」を主題として日本と台湾の戦前戦後の思想空間を往復しつつ分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『図書新聞』3338号（2018年2月10日）	6. 最初と最後の頁 5面
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 許時嘉
2. 発表標題 台湾人からみた「満洲国」
3. 学会等名 第23回東京ふすま会「山大の集い」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 許時嘉
2. 発表標題 被植民者からみた排日移民法 『台湾民報』を中心に
3. 学会等名 日本比較文学会東北支部第18回比較文学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 許時嘉
2. 発表標題 1920年代台湾人の「亞細亞」意識 從美國排日移民法の影響談起
3. 学会等名 開放的台湾史研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 許時嘉
2. 発表標題 歴史経験の反復と記憶の風化 日本人の目に映る台湾断髮運動を中心に
3. 学会等名 国際シンポジウム「文化の記憶 虚構の力」(愛知大学現代中国学部主催)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------